



らくじゅえん

# 楽寿園の歴史

れきし

江戸時代から今日まで

平成26年10月11日(土)～

11月30日(日)

三島駅前に広がる市立公園「楽寿園」は、四季を通じた豊かな自然や動物たちと触れ合える憩いの場として、また小浜池のほとりに建つ楽寿館など歴史ある名園として三島の人々に愛されています。

この小浜池周辺は昔から三島の人々にとって特別な場所でした。今回の企画展ではこの地がたどってきた道のりを振り返り、はぐくんできた歴史の豊かさを感じていただくものです。

## 三島市郷土資料館

関連事業 「みんなの楽寿園思い出の写真展」

開館時間 9:00～17:00(ただし、11月からは9:00～16:30)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌平日、ただし11月は休館日なし)

入館料 無料(ただし、楽寿園の入園料として

大人15歳以上300円/小人4歳以上50円)

〒411-0036 三島市一番町19-3(楽寿園内)

TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045

<http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>

# 江戸時代以前からの楽寿園

現在「楽寿園」と呼ばれる地は、三島駅南口南側に位置する広さ約75,474㎡の市民公園ですが、今から約1万2千年前に富士山が噴火した時流れ出た、溶岩流の末端にあたると考えられています。この溶岩は、「三島溶岩流」と呼ばれ、現在でも小浜池を中心とする園内各所で見ることができます。溶岩塚の集合した高まりが小浜山（現三島北高校～楽寿園付近）でした。また、溶岩流の末端にあたるため小浜池、菰池・白滝などの湧水地があります。

約1800年前の古墳時代では、耕作に不向きな土地のため居住地としては利用されていませんでした。墓地として使用された形跡があり、楽寿園西口付近に1基、東口付近に1基古墳が確認されています。

この地は三嶋大社との関わりも深く、小浜池は神職の「禊<sup>みそぎ</sup>」の場として使用されてきました。三嶋大社の祭典中、大祭は沼津の千本浜で浜下りが行われ、小祭は小浜で浜下りが行われたことから、この地は「小浜池」と呼ばれるようになったともいわれています。

## 江戸時代の小浜山付近

江戸時代の小浜池周辺は、数多くの寺社やお堂が建ち並び、農業用水や生活用水に必要な水源地でした。また、宿場北の小浜山一帯は、無宿人などのねぐらになったほか、処刑場（現在の三島駅北口新幹線ホームの西端付近）などがありました。



東海道分間延絵図  
(小浜池付近)

文化3年(1806)  
(東京国立博物館蔵)

小浜池付近の様子が描かれ本覚寺や愛染院など周辺の寺院の様子がわかります。

小浜山付近の主な寺社お堂



- ① 本覚寺
- ② 七面堂
- ③ 宝国院
- ④ 文徹院
- ⑤ 愛染院
- ⑥ 浅間神社
- ⑦ 光明院
- ⑧ 白滝観音
- ⑨ 広瀬神社
- ⑩ 長円寺
- ⑪ 西福寺

東海道分間延絵図 (小浜池付近解説) 東京美術発行



## 市内随一といわれた愛染院

三嶋大社と関わりの深い小浜の地には、三嶋大社別当である愛染院が小浜山の森の東に位置していました。愛染院は真言宗高野山派で、室町時代以降、三嶋大社別当職を務め、寺号を金剛山といい市内随一の大寺院でした。伊豆における名刹でしたが、安政の大地震で全壊後本格的に再建されず、明治初期の神仏分離令により、廃寺となっています。

その後、愛染院筆頭末寺であった薬師院（市内大社町）へ三嶋大社護摩堂の本尊の不動明王（愛染院守護であったもの）、宝物十二天軸、愛染院過去帳が伝えられています。現在、愛染院は本殿のあった地（市民文化会館前の道の中州状の場所）の溶岩などが残るのみです。

左：愛染院図

文政4年（1821）9月  
（矢田部家蔵）



七面大明神（本覚寺蔵）

## 小浜池の守り神 七面信仰

小浜池北西に、日蓮宗の名刹で永応31年（1424）日出上人開山の本覚寺の七面大天女（日蓮宗の守護神、龍神）を祀る七面堂がありました。江戸時代は七面信仰が盛んで、小浜池の守り神として厚く信仰されたそうです。また、女性の神様であったため、女郎の信仰も厚かったそうです。七面堂は街道にも広く知れ渡り、幕末の旅行ガイドブックといえる「五街道中細見記」にも記載されています。現在七面堂は、本覚寺境内に祀られています。

- ・浅間神社 伊豆国二の宮。富士登山者の信仰が厚く、溶岩流がここで止まったことから岩留浅間ともいわれます。
- ・白滝観音 現在の白滝公園の場所に白滝寺という尼寺があり、その本尊でした。（現在は常林寺にあり）
- ・広瀬神社 元是三嶋大社摂社の一つでしたが、小松宮別邸となった時に一時浅間神社に移転し、その後、伊豆の国市の広瀬神社に合併されます。昭和27年、楽寿園開園に伴い再び勧請し、楽寿園の守護神となります。

幕末の安政地震での倒壊や、明治初年の神仏分離令による廃仏毀釈運動のため、寺院の没落統廃合が進み、小浜山付近に数多くあった寺社やお堂は、現在では数少ないものとなりました。

## 水源をめぐる争い！

江戸時代の小浜山一帯は、富士の雪どけ水が湧き出る豊富な湧水に恵まれた地でした。ここを水源として、源兵衛川、四ノ宮川、蓮沼川が流れ、下流域の灌漑用水として人々の暮らしを支えていました。しかし、現在の三島地域だけでなく伊豆・駿河など広範囲に水が引かれるようになると、水不足となり水をめぐり争いが絶えなかったようです。



用水出入訴状

慶応3年（1867）5月、水源を巡り駿州駿東郡の5ヶ村（長沢・八幡・伏見・玉川・柿田の5ヶ村）と豆州君沢郡13ヶ村（長伏・青木・鶴喰・梅名・安久・御園など）の争いが起こります。駿河5ヶ村の惣代柿田村文左衛門が、「中郷13ヶ村の村人が勝手に堰を切って水を落とすので嚴重に取締ってほしい」と奉行都築駿河守に訴えたものです。この争いは、三島宿年寄や徳倉村の者が仲裁に立ち、駿河側と中郷側が水配人を設け交互に見回りをし、5ヶ年の期限を設けて実行することとし、7月によりやく和解しました。

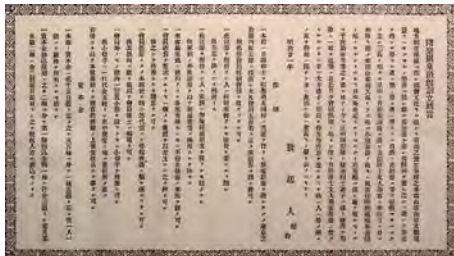
# 明治時代 ～小松宮別邸以前～

## 三島にも紳士の社交場を！

寺社の立ち並ぶ静かな小浜池周辺を開発しようという計画は、小松宮別邸建築以前、地域の人々によっても進められていました。明治13年（1880）に鹿鳴館が建設された東京では当時いくつもの社交クラブが発足しており、伊豆地域にも会員制社交クラブを作って風光明媚な小浜の地にクラブハウスを設立しようという計画が持ち上がったのです。

明治20年の社交場設立緒言並びに館則の下書きによれば、団体名は「三嶋倶楽部」、東京の芝公園内にあった紅葉館をモデルに小浜池周辺を整備して「偕楽園」、クラブハウスの名前は未確定ながら「公要館」とし、伊豆及び駿東郡の名士に呼びかけるものとしています。主催者はのちの三島町長三浦丈八郎、伊豆国人民惣代山口余一、初代三島町長河辺宰兵衛、賛成会員として世古六太夫、花島兵衛門、田中鳥雄など三島のみならず当時の北伊豆地域を代表する名士らが名を連ねています。

クラブハウス設立計画と並行して、小浜池に舟遊びができる施設を建設する計画も進められました。小浜池に浮かぶ小島にある広瀬神社の境内に「枕泉亭」という番小屋を建て、日よけのついた遊覧船を浮かべて避暑目的の舟遊びをするという優雅な計画です。計画の中心人物は三嶋倶楽部の発起人でもある三浦丈八郎で、社交場計画と一体として企画されたもののようです。



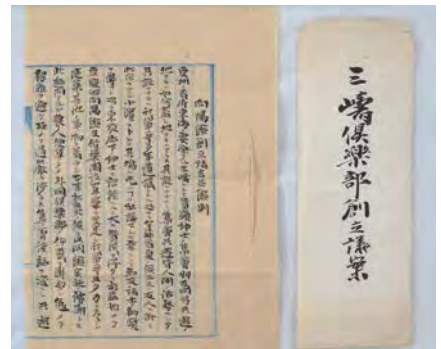
上：「階楽園泉頭館創立緒言」

クラブハウスの名称は「階楽園泉頭館」と改められ、一株5円で500株募集することや館内での規則などが書かれています。



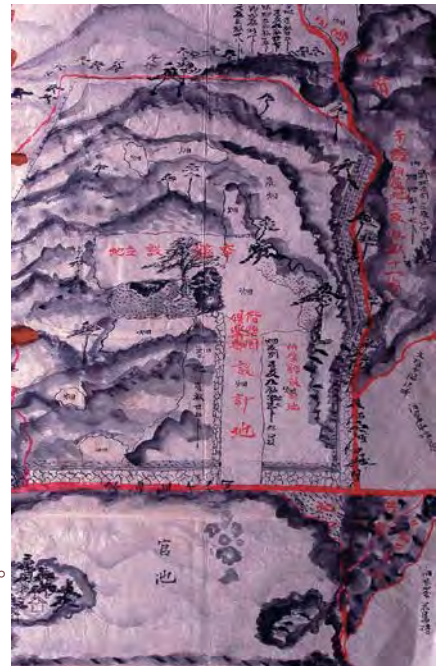
「為取換約定書」

世古家内に建設するにあたっての約定書。明治23年11月より20年間共有とするなど、運営についての詳細を記しています。



「向陽館創立緒言並館則」

下書き段階では館名の候補がいくつも上がっており、ここでは向陽館になっています。館則として茶菓を供することや琴・将棋・歌舞音曲の興業を行う予定であることなどが書かれています。



右：階楽園泉頭館設立計画図  
画面下「官池」が小浜池、赤く囲まれた部分が階楽園の予定地です。

## 計画縮小…幻に終わった「泉頭館」

会員を募り、敷地予定地にあった墓地を近隣寺院に改葬するなど着々と進んでいたクラブハウス設立計画ですが、明治23年、小浜の地が小松宮別邸の建築予定地に選ばれたことから、計画は変更を余儀なくされました。

泉頭館の建設は断念され、クラブハウスは大通りで旅館を営んでいた旧本陣家の世古家の敷地内に、旅館と棟続きで建設されることとなりました。「三嶋倶楽部」の看板は掲げるものの、会員による使用がない場合は世古家が使用し、代わりに修繕を受け持つことになり倶楽部独自のサロンという性格は薄れました。

当時の三島は明治22年開通の東海道線の駅が設置されず次第にさびれつつある頃でもあり、このクラブハウスも明治29年頃には廃止となりました。



くろやなぎたいすい  
畔柳對水面

「小浜丘之図」

小松宮別邸建設前の明治23年（1890）に描かれました。

小浜池は満々と水をたたえ、蓮沼川、源兵衛川は水量たっぷりに流れています。

小浜池周辺の川

- ① 蓮沼川
- ② 源兵衛川
- ③ 桜川

### 水源地としての小浜池

小松宮別邸計画は三島の人々にとって喜ばしいものでしたが、ひとつの懸念もありました。「小浜池の水」です。

前述のように、小浜池を水源とする水は流域の村々で水争いが起きるほど、三島周辺の人々の農業用水、生活用水としてなくてはならない重要なものでした。

この小浜池が宮家のものになっては将来に渡って水の確保に影響がでるのではないかという意見も出たため、池周辺の一部は「別邸付属地」として邸宅や庭園のある敷地とは垣根で仕切り、用水組合が用水確保のための浚渫などを行えるよう便宜が図られました。



「小浜丘之図」より水車小屋部分

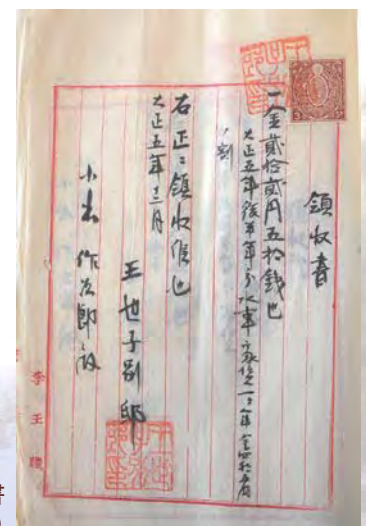
この領収書が、明治時代の小松宮所有時代から昭和初期の緒明家所有時代まで、綴りで残されています。この綴りによれば、明治36年の小松宮死去後も明治末年までは小松宮所有であったことや、水車小屋の修繕費を二度に渡って拝借していることなどがわかります。

昭和5年（1930）の北伊豆震災で水量が少なくなり、翌年ごろには水車の稼働をやめたと伝わっています。

### 水車小屋と小浜池

「小浜丘之図」では、蓮沼川と源兵衛川の間に小さな小屋が描かれています。この小屋は水車小屋で、よく見ると桜川周辺にもいくつもの水車が描かれています。

小浜池が宮家別邸になった際、源兵衛川への分岐点にあった水車の持ち主であった小出氏は、小松宮家に拝借料を払うことで引き続き水車の稼働を認められました。小出家からは半年ごとに22円50銭支払っており、これは李王家、緒明家にも引き継がれました。



右：水車小屋使用料の領収書  
(関守敏氏蔵)

# 別邸の造営 ー小松宮別邸時代ー



小松宮彰仁親王肖像（関守敏氏所蔵）

## 軍人皇族、小松宮

小松宮<sup>あきひと</sup>彰仁親王は弘化3年（1846）、伏見宮邦家親王の王子として生まれました。幼い頃より仏門に入り、仁和寺<sup>にんなじ</sup>の第三十世門跡となりましたが、慶応3年（1867）復飾して仁和寺宮嘉彰親王となり、議定職を仰せつけられます。明治元年（1868）に軍事総裁となり、戊辰戦争では会津征討総督に任ぜられるなど活躍しました。宮号を東伏見宮と改めたのち英国へ留学し、帰国後は陸軍を志望して軍人皇族第一号となりました。西南戦争では新撰旅団司令長として現地へ派遣されるなど活躍し、明治14年には維新以来の功績により家格が世襲親王家となり、翌年宮号を小松宮と改めました。

軍人であった小松宮は、富士での演習の際三島へ立ち寄り、小浜の地を気に入って別邸造営を決めたと言われています。明治23年の秋には地ならし中だった小浜池周辺を検分に訪れています。（『静岡大務新聞』明治23年10月21日記事）。



上：明治時代の地図（部分）

まだ三島駅も駅前の県道もなく、別邸の敷地は現在の楽寿園より駅方面に向かって北に広がっていたようです。

## 別邸の建築

明治24年6月に上棟式が行われ、完成は同年から翌年にかけてのことと推定されます。楽寿の間からは、宮の本邸がある東京の駿河台から三島へ送る際の番付札が見つかっており、一度東京で仮組されたあと部材を三島へ送って再度組み立てて建築されたことがわかります。

今の楽寿館と小松宮別邸時代との大きな違いは、梅御殿や桜御殿と渡り廊下で繋がっていたことです。廊下の途中には宮様専用の風呂湯場や女官部屋が設けられおり、今とは別の場所に設けられていた玄関には供待ち部屋がありました（p 8「緒明家建物平面旧図」参照）。

邸内には襖や床の間、廊下の杉戸などいたるところに絵画があしらわれていました。絵を手掛けたのは帝室技芸員はじめ、当時の日本画壇を代表する作者によるものです。



## 小松宮薨去後の別邸

小松宮は明治35年12月に三島別邸へ滞在されましたが当地で病に倒れ、東京の本邸に戻った後の翌36年2月、薨去されました。

宮亡き後の明治38年、別邸の建物の一部が修禅寺に移築されたと伝わっています。大正4年から修禅寺住職を務めた丘球学師の著書『般若台禅話』によれば、修禅寺移築後は「般若台<sup>ほんにゃたい</sup>」「鶴夢楼<sup>かくむろう</sup>」「書院」と呼ばれており、鶴夢楼は宮様の居間だったと記されています。

周囲の庭園を整備するなどして長年残されていましたが、老朽化により取り壊され現在は残っていません。

左：梅御殿杉戸絵「<sup>しばおんこう</sup>司馬温公図」草野龍雲作

# 宮様と三島 — 市民との交流 —

## 三島高女と宮様

明治32年（1899）、高等女学校令が公布され、三島でも高等女学校設立の気運が高まり、明治34年田方郡立三島高等女学校（現在の県立三島北高校）が創立されました。学校用地として小松宮別邸東側付属地（現在の楽寿園正門付近）を借用し、当初は別邸の養蚕室を教室・寄宿舎に転用してのスタートでした。当時は三島駅まで伸びる市民文化会館前の道路（県道三島停車場線）がまだなく、現在道の中州状態になっている愛染塚も学校敷地内で、桃夭園と呼ばれていました。

小松宮は、学校を訪問するなど三島滞在中たびたび三島高女の生徒らとの交流を持たれ、園遊会を催し生徒、職員を招待されることもありました。小松宮が薨去された明治36年に行われた第一回卒業式でも庭園が開放され、3000人もの方が訪れました。

生徒数の増加に伴い手狭になり、三島高女は大正13年（1924）に宮町校舎（現在の順天堂大学保健看護学部敷地）に移転しました。



明治時代の三島高女校舎  
小松宮別邸付属地にあった  
ころの校舎。左下は明治  
39年新築の寄宿舎です。

## 三島の人々と宮様

三島の人々にとって宮様の別邸に選ばれたことはよろこばしく、折々に歓迎の意を示しています。

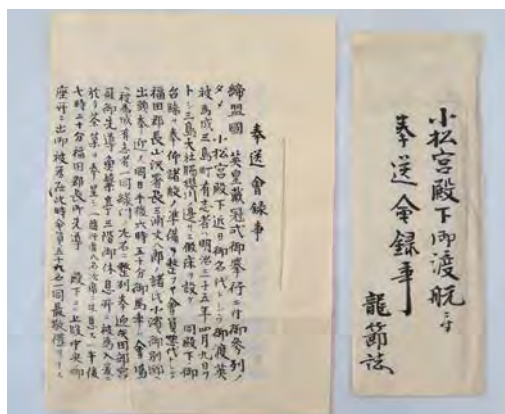
明治35年、小松宮が明治天皇の名代としてイギリス国王の戴冠式に出席することになった際は、町長以下有志が集まり奉送会が行われました。

奉送会の様子は、当時三島町長だった河合龍節の残した「奉送会録事」に記録されています。

奉送会は4月9日、三嶋大社脇の桜川に仮床を設けて行われました。田方郡長、警察署長、元町長らが別邸にお迎えにあがり、小松宮は午後7時前に馬車で三嶋大社に到着しました。出席者は矢田部宮司をはじめ左右に並んで小松宮をお迎えした後、小休憩をはさみ宴席となりました。酒肴はもちろん有志による演舞などの余興も披露され、小松宮も色々お話しをされ出席者全員に盃を賜るなど、大いに盛り上がったようで、午後11時まで続きました。

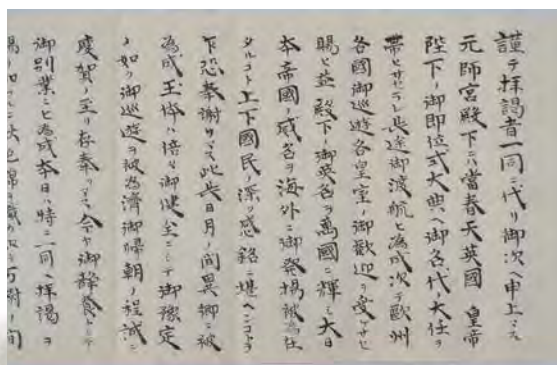
小松宮は同年8月26日、イギリスから神戸港に帰国しました。帰国後は京都や三島の別邸に1泊したのち東京へ戻っています。その後10月9日、渡英に際しての奉送会へのお礼でしょうか、三島の別邸で園遊会が催されました。前日に出席者宛てに河合町長から出された回状には、礼服用の上2時半に別邸表門の南に隣接する本覚寺に集合し、全員で何うことなどが記されています。

この年の年末に三島で倒れた小松宮は翌年に薨去します。生前の12月31日、三島での看病にあたった医師などにお礼の下賜があり、東京から招いた医師たちのほか当時の三島病院長へも下賜されています。



「奉送会録事」河合龍節

当時の三島町長で会の惣代であった河合龍節によって書かれた記録。別邸までお迎えに上がるところから宴会後のお見送り、出席者氏名まで当日の流れが詳細に記録されています。



河合龍節によって園遊会で述べられた謝辞（下書き、冒頭部分）。当日は料理がふるまわれ小松宮に拝謁する機会もあったようです。

# 大正時代 一李王世子別邸一



李王世子垠・方子夫妻

## 朝鮮皇太子の来日

小松宮に次いでこの地を別邸としたのは、朝鮮王族の李垠<sup>りぎん</sup>殿下でした。李垠は明治30年（1897）に李氏朝鮮第26代皇帝の王子として生まれ、英親王の称号を得ます。明治40年、10歳で大韓帝国皇太子となり来日しました。留学の名目でしたが、人質のような立場であったと言われています。

明治43年の日韓併合後は李王世子垠殿下となり、日本の皇族に準じる立場となりました。

## 李王世子と三島

李王世子は、陸軍幼年学校在学中の明治45年7月に三島別邸に滞在し、以後毎年のように避暑に訪れたといわれています。大正6年（1917）には兄である李王<sup>せき</sup>圻が来日し、三島をともに訪れています。

大正9年には梨本宮<sup>まさこ</sup>方子女王と結婚し、長男<sup>しん</sup>晋が生まれますが、朝鮮帰国中まだ1歳にならぬ長男は亡くなってしまいます。悲しみの中、三島で避暑中の夫妻の元に方子女王の伯母前田侯爵夫人や母梨本宮伊都子妃が訪れ、夫妻を慰めました。



「李王世子別邸図」

大正時代の別邸の様子が詳しく描かれています。

## 三島の人々との交流

三島の人々との交流としては、李王世子殿下恩賜賞があげられます。これは三島高等女学校（現在の県立三島北高校）と三島第一・第二尋常小学校（現在の市立南小学校・東小学校）へ奨学金として下賜された100円を基に制定されたもので、優秀な生徒に与えられました。

まだ若く遊びたい気持ちもあったであろう王世子は、当時園内にあった望楼から川遊びの子どもたちをよく眺めていたそうです。

## 建物の変化

小松宮時代からの変化としては、ホールの建て増しがあります。ホームバーを備え、ダンスが行われたと言われていたようですが、戦後の米軍接收時代にペンキを塗られています。また、どこにあったのか定かではありませんが、「葡萄室」の建築部材の納品書が残されています。



現在の楽寿園南口の西側にあった表門。現在は日の出町の妙行寺へ移築されています。



蓮沼川から見た別邸。中央右寄りの望楼は小松宮が日清戦争の際に持ち帰ってきたものと言われています。



三島高女の李王世子賞受賞者に与えられた蒔絵の硯箱。



# 昭和初期 一造船王、緒明家一

## 名園、危機一髪！

かねてより欧州歴訪を望んでいた李王世子夫妻ですが、朝鮮王族出身という立場ゆえ公費負担による公式訪問はなかなか実現せず、私的訪問による欧州旅行を計画します。その費用を捻出するため三島町に別邸の購入を打診しましたが、町は約30万円という当時の年間予算に匹敵する巨費を捻出することができず、分割販売もやむを得ない状況になりました。

当時錦田村に住んでいた緒明圭造は、このままでは由緒ある名園が消滅してしまうことを惜しみ、購入を申し出ました。こうして昭和2年（1927）、李王世子別邸は緒明邸となりました。



緒明氏所有の頃の楽寿館



緒明家の人びと



「三島緒明家庭園略図」（関守敏氏蔵）

三島駅前の市道小山三軒家線によって敷地の一部が分割され、芝町から駅へ向かう県道三島停車場線により東側も少し削られています。小松宮時代の地図と比べても北側が駅によって狭くなっていることがわかります。

## 造船・海運の雄、緒明家三代

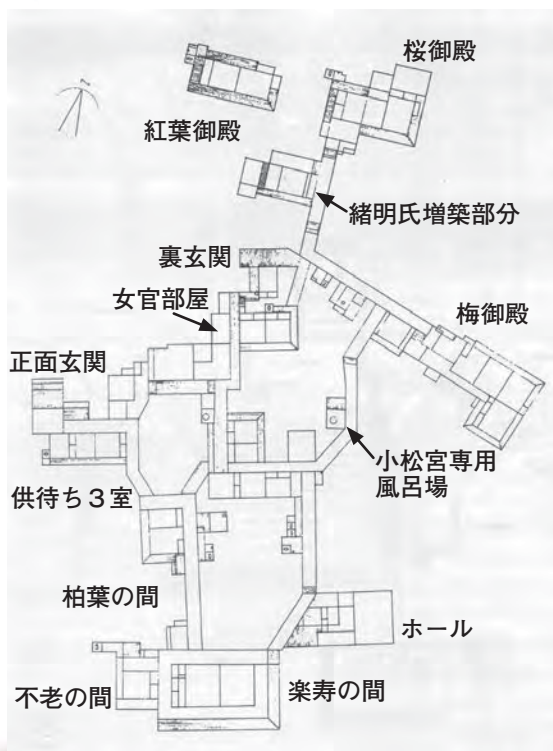
別邸を購入した緒明家の発展は幕末にさかのぼります。当時田方郡戸田村（現在の沼津市戸田）の船大工であった緒明嘉吉は、嘉永7年（1854）ロシア使節プチャーチンの乗った軍艦ディアナ号が地震により戸田沖で難破したため行われた、代替船ヘダ号の建造に携わった造船世話掛の一人でした。日本初の近代造船事業となったこの現場では、嘉吉の息子菊三郎も作業を手伝いながら技術を学びました。明治5年（1872）に上京した菊三郎は、水上バスの前身である一銭蒸気の運行で成功し、明治16年に緒明造船所を設立します。

事業を引き継いだ娘婿の圭造は、インドネシアと日本を結ぶ南洋航路や小笠原諸島との航路を就航させるなど海運事業にも尽力しました。



「緒明家奨学貸費規定」

緒明家では篤志活動もさかんでした。優秀でありながら学費を工面できない若者に奨学金の貸与を行い、優秀な成績であれば返済免除になりました。



緒明家建物平面旧図

楽寿園になる前の建物の様子です。渡り廊下で繋がっており、小松宮時代からの様子が伺えます。（報告書「楽寿館の建築」所収の図を基に作成）

# 楽寿園開園 — 市民の憩いの場へ —



小浜池付近（昭和30年代）

## 昭和27年、市民に開放

以前から緒明邸の公園化は検討されてきましたが、昭和26年（1951）市制施行10周年記念事業案として取上げられます。市民の強い希望もあり、公園化構想が本格的に動き始め、昭和27年7月15日に開園しました。開園式は午前11時に園内「子供の広場」で盛大に行われました。16日17日と、一般に無料開園され、2日間の入園者は約2万6千人という多さでした。公園の名前は、旧邸宅内の「楽寿の間」にちなんで命名された「楽寿園」のほかに、「小浜園」や「三島公園」などの提案もありましたが、「楽寿園」に決まります。

## 市民の憩いの場へ

昭和28年頃から、楽寿園に動物が飼育されはじめます。日本ザル、クジャク、アナグマ、そして、三嶋大社からは鹿がやってきました。このころから小動物園としての形が作られていきます。また、お茶会の催しや楽寿館での結婚式なども行われ、夏には夜間入園も実施されました。「菊まつり」は開園当初から行われ、昭和40年代頃まで菊人形が作られていました。菊人形は全12場面程の構成で、菊人形を作る菊師、セットを作る歌舞伎の大道具係・小道具係を呼ぶ大掛かりなものでした。三島の「菊人形」は有名で、県外からも観光客が押し寄せたそうです。また、楽寿園は昭和29年3月20日には、国の天然記念物及び名勝に指定されています。



菊祭りの様子（昭和32年）



童謡まつりキャラバン隊  
大社前出発

童謡まつり、キャラバン隊  
三嶋大社を出発し、焼津から箱根を越えて小田原まで宣伝に出かけました。



小田原

## 市民の娯楽の場へ

昭和30年代からは、遊具や動物なども増え市立公園でありながら、動物園、遊園地も含めた市民の娯楽の場所へと変化していきます。夢の電車（子供用電車）に続き、ロケット飛行塔、木馬、豆自動車、空飛ぶ円盤などの遊具も設置され、こどもたちに人気でした。ゾウ、キリンなど花形動物のほかに、ライオン、ツキノワグマ、ペンギン、オオサンショウオなど数多くの動物がいました。また、「童謡まつり」「アフリカ探検」「オートバイ展」など多種多彩な催し物も増え、現在でも続く「洋らん展」「えびね展」「さつきまつり」も催されています。

# 楽寿園の遊具と動物たち



ふじ子の玉のりの様子（昭和30年代）

## ぞうのふじ子

昭和29年3月、4歳のメスのゾウがインドからやってきました。三島に到着すると、大社前から二日町、谷田、西小学校付近など、市内を約1時間半かけてパレードを行いました。名前は、1828通もの応募の中から「ふじ子」が選ばれました。玉乗りなど、楽しい芸もみせてくれたふじ子は、平成2年12月に亡くなるまで、36年もの長い間楽寿園に来園した人々を楽しませてくれました。

## 初代きりん いずみ

昭和33年7月、アフリカのケニアから1ヶ月以上も船にゆられ3歳半のメスのキリンがやってきました。「いずみ」という名前は“水のみしまのキリン”という思いがこめられているそうです。写生大会では、いつも人気ナンバーワンでした。昭和51年7月に亡くなるまで18年間楽寿園の人気者でした。



いずみ 楽寿園到着の様子（昭和33年）

## 2代目きりん たか子、きりお

たか子は昭和52年7月に東京の多摩動物園から、きりおは昭和52年11月に横浜の野毛山動物園から、やってきました。きりおは14歳で亡くなりますが、たか子は27歳まで生き、当時日本一長生きのキリンとなりました。

## その他の動物や遊具



左：クジャク（昭和33年）

楽寿園には、クジャクが多いときで100羽以上いました。

右：ベンガルトラ（昭和40年代）

ベンガルトラの赤ちゃんは、お母さんを早く亡くしたため犬のお乳をもらって育ちました。



モノレール（昭和42年）



キャタピラー（昭和30年代頃）



SL C58蒸気機関車（昭和46年）



満水の小浜池（平成23年）



雪の楽寿園（平成26年2月）

## 「楽寿園の歴史 —江戸時代から今日まで—」

平成26年10月11日(土)～11月30日(日)

# 三島市郷土資料館